

各地の農場には優秀な若手が勤務している。数ある職場のなかで、農場に勤めることを選んだ彼らは、農業や勤務先をどのように見つめ何を感じているのか。前回に引き続き、福井県でコメを生産・販売する(株)アースワークに勤める榎康伸氏と滋賀県でブルーベリーを栽培している(有)ブルーベリーフィールズ紀伊國屋に勤める大川勝巳氏の対談を紹介する。

榎 農学部出身ということですが、そのときから農業をしようと思っていたんですか。

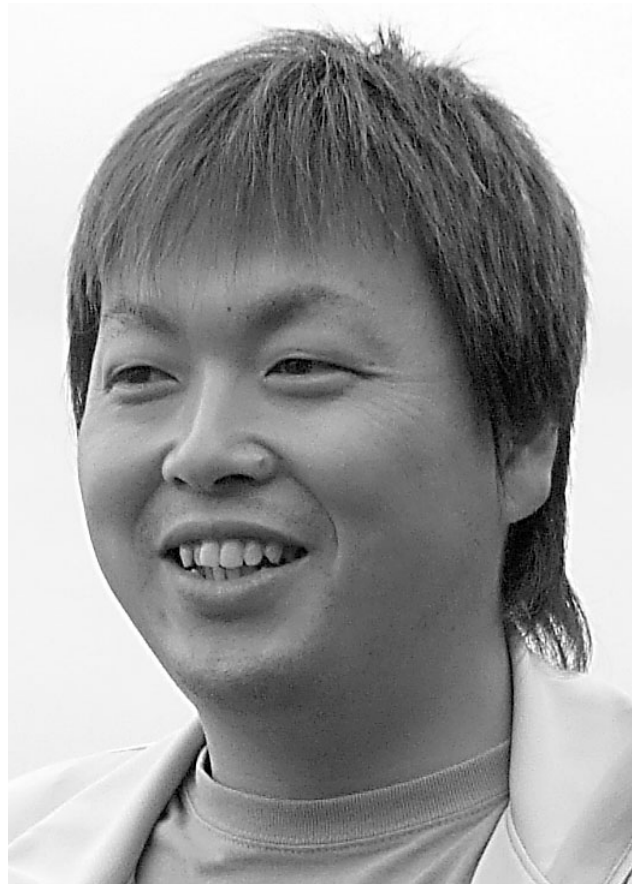
大川 いえ、もともと農業がしたかったわけではないんですよ。農学部に入ったのも、ほかに勉強したいことがなくて消去法で選んだ結果なんです。といつても、たとえばスーパーにあるコメはどうやって作られているんだろうとか、そういった食べ物背景についての関心は持っていました。

榎 では、どうして農業をやったんですよと思ったんですか？

大川 うまく説明するのは難しいのですが、農業なら人間らしい生き方ができるんじゃないか……そう思ったんです。

榎 というと。

大川 子供のころの話になります。田舎のおじいちゃんとおばあち



訪問農場に勤める夢

第15回

農業だからできる生き方

……の巻

今月のゲスト

榎 康伸 (31歳)

出所備

身：福井県大野市
属：(株)アースワーク

考：1975年生まれ。93年、靴の小売を行なう(株)靴のマルトミに入社、95年から直営店の店長を務める。97年、中古車の買取を行なう「ガリバー」に転職、1年間店長も務める。99年、(株)アースワーク入社。生産から企画、営業までを担当。2006年4月からは取締役も務めている。

やんのところへ遊びに行くと、自分達で食べる分だけの農産物を作って、梅酒や干し柿などの保存食に加工したりしながら生活している姿がありました。それを思い出した時、様々な知恵を活かしながら生きていくその姿に、人間くささというか、人間本来の生き方があったような気がしたんです。いい面も悪い面もすべて結果に出る農業でなら、そういった生き方をしていけるんじゃないかと思ったんです。

榎 地に足をつけるというか……生き方としての農業に魅力を感じたんですね。

大川 それで、勤めていた会社を辞

めて、まず農業の専門学校に行くことにしました。

榎 こちらの農場に入社したのはどうしてなんですか？

大川 農業ですつと食べていくことを考えると、ひたすら地道に生産していくだけでは、つらいだけなのかもしれないという思いがありました。それよりは、農場にお店が併設されていたり動物がいたりするような観光農園で楽しく働きたいと思っただけです。こういった条件で就農先を探していたところ、いま勤めている農場を知人の紹介で知りました。実家の岡山県にも比較的近いということと、たまたま農場のスタッフが辞めるといふ話もあってタイミングもよかったです。そこでお世話になることにしました。

榎 就農して3年になるんですね。実際、仕事としてやってみて、イメージと違ったりしませんでした？

大川 イメージ通りのところで、楽しく仕事をさせてもらっています。それに、基本的に自由にやらせてもらえるんです。といっても、作業に追われる毎日なので、やりたくても手がつけられないことも多いんですけどね。社長にアドバイスをもらうこともありますが、この3年の間にいくつか失敗もしましたし、反省することも多かったですね。

榎 うちの農場も僕が入った時はそういうやり方でした。自由にやらせて失敗したときに初めて、「な、違うだろ」と言っていてわからせてくれる。体験を通して根本的なところを理解していく方が、人は成長するんですよね。

大川 それは(笑)僕も実感しています。カボチャやナスなどの野菜を何種類か栽培したことがあったんですが、これが大失敗でした。たとえばキュウリなんかは生育させるまではいいんですが、収穫できないものもありました。結局、収穫できないものもありませんでした。今思うと、当時は人に頼りすぎていたんですね。この失敗を通して、売りと買るところまでしっかり自分で考えて取り組んでいくのが、農業をする人間の仕事なんだと気付きました。

榎 僕も、ほぼ毎年失敗してますから。そうやってレベルアップしていくんですね。

大川 そうなんですね。これからは、これまでできなかったことを少しずつ改善してやっていきたいと思っています。ブルーベリーの摘み取りについても、以前は、お客さんがどれくらい摘み取ったのか把握できていなかったのですが、去年から、どれくらい摘み取られたのかをきちんと計算するようにしました。これで、

予約人数の枠を増やすことも検討できるようなりました。

榎 少し先を見据えた取り組みができるようになったんですね。

大川 ハイ。就農1年目は、わけもわからずやっていたんですが、2年目以降は仕事の幅も広がって、ようやく仕事になってきたような気がしています。といっても、榎さんの仕事はもっと大変なんですよ？

榎 僕もやりたいと思っていながらもなかなか進められないこともありますね。でも、この仕事は今までやっていたの仕事より身になっています。しかも、自然にも触れられる。ただ、就農して3〜4年目から営業もする



今月のホスト

大川 勝巳 (29歳)

出身 岡山県高梁市
所属 (有)ブルーベリーフィールズ紀伊國屋
雇用形態 社員
備考 1978年生まれ。2002年、近畿大学農学部卒業後、大阪の焼肉店に就職し、2年間勤務。04年、農業を志し同社を退社、専修学校日本農業実践学園に入学。1年間、野菜栽培を学ぶ。05年、(有)ブルーベリーフィールズ紀伊國屋に入社。現在、農園部チーフを務める。



小高い山の中腹にあるブルーベリーフィールズ紀伊國屋。ブルーベリー園の向こうには琵琶湖が広がる。

ようになって、農業は楽しいだけじゃないんだということがわかってきました。商談などはお金も絡んできませんし、こういったことを気にしながら仕事をしているので、実は、小さくまとまっているのかもしれないですね。

大川 長く勤めていると、また別の側面が見えてくるんですね。正直なところ、今は、農業を仕事にしていることの生活上の不安もあるんですよ。収入が平均から考えると少ないだろうこと、そういう中で、結婚し

て子供ができたときに自分が何をしなくてはいいのかということ……。それでも、農業に携わっているからこそその楽しさは伝えたいと思っています。もつとも、そのすべてを満たせる農業になればベストなんですね。

榎 そうですね。いろいろ考えることはありますね。ただ、少なくとも「おれはいくらでもやってやるぞ！」という勢いを持っていた方がいいのは間違いない。うちの社長を見ても、50歳近いですけど、自分がやりたいことを率先してやっていく。しかも、ただやるだけではなくて、すべての範囲に目が届いた上でやっているのが凄いです。ブルーベリーフィールズの社長さんも、

コメ作りにも関心があつたりと、いろいろな取り組みをされる方ですね。

大川 新しいことをどんどんやりますね。農業をやるだけじゃなくて、いろいろな問題にも目を向けていて勉強会を開いたりもしています。や

りうと決意したら、いろいろなやり方を考えながら諦めずに最後までやり遂げてしまう。そういう生き方をそばで見ていると、気付かされることもいろいろありますね。

榎 従業員としては、そうした社長についていくのは大変なところもありますよね。車に例えると、社長は常に時速100kmで走っている感じ。従業員は70kmくらいで必死で社長を追いかけるわけです。まれに、もう少しで追いつくかなと思う瞬間もありますが、社長はさらに加速していく。その先を読めないことには社長を越えることはできないんですよ。そういうところを見せつけられると、「さすが」といわざるを得ない。でも、そうした経営者であるほど、ほかの農家さんからは冷ややかな目で見られることも多いみたいです。

大川 うちの社長も、この農園を始めた当初は、周りからそういった反応をされたと言っていました。

榎 やはり新しいことを始める人の周りでは、必ずそういう反応がでるんですね。福井県の場合は、地域によって言葉も考え方の傾向にもかなり違いがあるんです。それだけに、うちの会社の取り組みが、そういった人たちにも広く認められるようになる動きやすくなるんですね。

大川 僕はもういずれ、社長を越えるくらいに成長したいですね。

榎 若い自分達が、そうやって農業を変えていかなとイケない立場でもありますから。

大川 僕の場合は、農業者として品質が良いものをたくさん収穫できるようにになるところからですね。これからは営業もしていくつもりです。で、販売にも力を入れていきたいと思っています。